あしたの教育を考える

教育最前線

Education Vanguard

第3号

【特集】

グローバル化する社会における英語教育

●総論

根岸雅史

東京外国語大学大学院
総合国際学研究院 教授

●取組報告

《東京都》

森 晶子

東京都教育庁指導部
国際教育事業担当課長

《江東区》

金指大輔

東京都 江東区教育委員会事務局
統括指導主事

【三省堂の歩み】

小説のなかの三省堂刊行物

特集

グローバル化する社会における英語教育

――世界の人々との共生と新しいテクノロジーとの共生

根岸雅史（東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授）

今日、世界は急速にグローバル化している。日本に限っても、海外旅行者数も訪日外国人旅行者数も急増している。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを契機に、訪日外国人旅行者数はさらに増えるであろう。

こうしたグローバル化した世界では、英語を含む様々な外国語ができるということは、職業選択の幅を広げる。海外で勤務することを厭わないかどうかは、企業に就職の際にも大きな分かれ目となっている。そもそも、日本企業を前提とするのか、海外の企業も含めるのかでは、企業の選択肢の数は大違いだ。大空にあこがれてパイロットになろうとしても、英語ができなければならないことに気づくだろう。

私たちの学生時代には、街で外国人に出くわすことは滅多になかった。ところが、今では、職場の同僚や生徒の中に外国人がいたり、ご近所さんが外国人だったりする。外食をすれば、外国人の店員やお客を目にすることも珍しくはない。

これは、何を意味するのか。それは、以前はごく一部の人々だけが経験していた外国人との出会いが、誰彼なく起こるということである。つまり、これまでは、限られた人々だけが、実際に英語（本当は「外国語」。以下は、国際共通語（リンガ・フランカ）としての「英語」）を使うことが求められたが、これからは誰でも英語を使う可能性があるということである。先日テレビで、外国人客に悪戦苦闘するタクシー運転手の様子が流れていた。五十歳代のこの運転手はおそらくこの職業に就いたときには、自分が英語を話すことを求められることになろうとは予想だにしなかっただろう。

ほとんどの人々は、学校で学んだ英語を使えるようにするために特別な研修を受けたりすることはない。学校で学んだ「素のままの英語」での問題解決が求められる。そうなると、学校英語教育の果たす役割は非常に大きい。学校英語教育が社会の求める英語力をつけずに生徒を世の中に送り出すとなれば、「学校英語は使えない」となり、「学校英語教育」に対する不満がますます増大するであろう。

英語教育では、「第二言語としての英語（ＥＳＬ：English as a Second Language）」と「外国語としての英語（ＥＦＬ：English as a Foreign Language）」が区別されてきた。教室の外でも英語が話されているような環境はESLとされ、日本のように教室の外では英語が話されていないような環境はＥＦＬとされてきた。しかし、世界のグローバル化により、日本のような環境もＥＦＬとは言いがたくなりつつある。教室を出て、様々な外国人と出くわすことも稀なことではないかもしれない。さらに、インターネットの世界では、もとより国境を簡単に越えていく。というか、国境を越えていることすら気づかないほどだ。かつて、生の英語に触れることにどれだけ苦労したかを思い出してほしい。その上、私たちが触れる英語のトピックの幅も恐ろしく限定的だった。かつては中身に興味があってもなくても、ＦＥＮ（Far East Network, 米軍極東放送網）

を聞くしかなかったが、今では音楽でもスポーツでもドラマでも好きなトピックを選ぶことができる。

今日の世界では、英語「学習者」は最初から英語「使用者」となる。つまり、いつの日かできるようになって初めて使い出すのではなく、学び始めたところから使い始めるということだ。これこそCEFR（Common European Framework of Reference for Langauges）の精神である。「使用者」ということは、何かの目的のために言葉を使った行動をするということを意味する。英語の授業やテストは、間違えれば減点される「引き算の世界」かもしれないが、現実世界で言葉を使うのは、「足し算の世界」だ。間違っても、使うだけ得るものがある。

こうして外国人との直接的な交流の機会が増すことで、様々な気づきがもたらされるであろう。今までにテレビやネットでは見たはずのことでも、現実に経験することはまったく違った意味を持つのだ。

同じ物事に関する考えや、同じ場面における行動でも、かなり異なっていたりする。私はかつてイギリスで「人間の祖先は猿の祖先と共通である」という主題について肯定側でディベートを行ったことがあるが、相手側にいたある宗教指導者に完全に論破された経験がある。こうした経験を通して、「世界の人たちはみんな違っているなぁ」とか、「こんな考え方やこんな行動もありなんだ」とか、考えるようになる。

もちろん、異質なものとの接触は楽しいことばかりではない。特に一緒に事を進めていかなければならないときは、大変だ。想像だにしなかった観点からの反論があったりするときなどは、コミュニケーションを断念したくなることもあるだろう。しかし、そこで、「違っているからおもしろい」とか「違っているのもおもしろい」と考えることができれば、なんとかやっていけるかもしれない。また、そこから学ぶことにも大きな意義がある。

◇ ◇ ◇

世界がグローバル化を迎える中、日本の英語教育はこうした動きに十分に対応してきたとは言えない。これまでに打ち出された英語教育改革の施策は、数え切れないほどある。これらの施策には、学習指導要領の改訂から現職教員の研修や教員養成の改善まで様々なレベルのものがあった。しかし、こうした施策は、高等学校の出口にある大学入試の前に実効性を失ってきた。

そこで繰り出された施策が大学入試改革で、これは二〇二〇年度に行われる入試から始まる。この改革は従来の「知識・技能」中心の評価から、「思考力・判断力・表現力」へのシフトを指向するものだ。この改革は、大学入試制度全般の改革ではあるが、とりわけ英語にとっては、特別な意味を持つ。それは、大学入試における英語の四技能化である。

これまで日本の大学入試の英語は、もっぱら「読解問題」と「文法・語彙問題」が出題されてきた。そのため、授業もこれらの問題解説のような授業がほとんどであった。高等学校が大学入試での希望進路の実現を目標に掲げるのであれば、訳読式の授業はある意味理にかなっていたことになる。テストに出ることを教える、そして、テストに出ないことは教えない。この傾向は、とりわけ高校三年になるとさらに強化されていくということが様々な調査からわかっている。ベネッセ教育総合研究所『中高生の英語学習に関する実態調査２０１４』(p.6)を見ると、授業中の指導としては、「話すこと」「書くこと」という活動は中二をピークに高三に向かって下がり続けていることがわかる。さらには、アルク教育総合研究所が行った『日本の高校生の英語スピーキング能力実態調査Ⅲ』では、三つの高校の生徒の英語スピーキング力を三年間追っているが、生徒のスピーキング力が唯一伸びているＢ校の生徒でさえ、二年から三年に向けてはほとんど伸びていない。これらの調査結果は日本の英語教育では大学受験に向けどんどん発表技能への指導の比重が減っていくことがわかる。

こうした状況を受けて、来たる大学入試改革では、英語の四技能化が図られようとしているのだ。これまでほとんど出題されてこなかった「話すこと」「聞くこと」「書くこと」といった技能を測定する問題が、入試で出題されることになる。

では、こうした大学入試改革を受けて、指導はどうなるであろうか。大学入試改革の議論の中では、「話すこと」の受験対策が、一部の英検受験予定者に施してきた「面接対策」のように語られることがあるが、これは間違いである。「面接対策」では、ＡＬＴや日本人教師が授業時間外に「面接練習」を提供したり、過去問集を貸与したり購入させたりして、生徒自身に準備させていた。しかし、これからの「話すこと」の指導は、ほとんどの生徒に必要なものとなるのである。だからこそ、「授業」そのものが大きく変わらなければならない。

では、「授業」はどのように変わるのであろうか。「話すこと」の指導技術が確立していない受験産業でも、そこで提供されている「話すこと」の受験対策は、ＴＯＥＦＬや英検の過去問を用いての解法解説から、音読やシャドウイング練習やオンライン英会話、対面の英会話といったサービスの提供までと、実に様々である。四技能入試の大学受験者としての成功体験を持ち合わせていない学校の英語教師が、教室内の一斉授業の中で「話すこと」の指導をどう行うかは、当面は手探りな状況となるだろう。

いずれにしても、指導上の混乱の後に、英語教師の訳読中心の指導観が変わってくるはずだ。まずは、「話すこと」「書くこと」の指導の取り組みにより、言語習得の「技術」としての側面に気がつくだろう。これまでに学習者に詰め込んできた文法や語彙などの言語知識を持っていることは、必ずしもそれらの知識を使えることを意味しない。いや、むしろ、これまでの第二言語習得研究によれば、持っている言語知識のうち実際のコミュニケーションで使いこなせるのはごく一部である。だからこそ、「話すこと」や「書くこと」の指導では、生徒に「話させたり、書かせたり」させなければ、できるようにはならないという単純な事実に気づくであろう。現状では、一授業時間で生徒が英語を話すことはほとんどない。話すことをしなければ、話せるようにはならない。今までのように、英語についての「解説」をしていただけでは、「技術」は身につかない。

さらに、「話すこと」「書くこと」の指導の取り組みにより、発信における「メッセージ」とその言語化の重要性に気づくであろう。狭い意味の言語能力を高めたとしても、伝えるべきメッセージがなければ、何も話したり書いたりすることはできない。しかも、即興的な「話すこと」においては、「メッセージ」の生成とこの言語化は連続的に行わなければならないのだ。

英語教育の四技能化の議論の中で、「話すこと」「書くこと」へ力点を移すことで、「読むこと」の能力が下がったり、「文法」指導がなくなるというような議論が行われるが、本当にそうだろうか。確かに、これまでのように英語を日本語に訳すための時間は減ってくるだろうが、英語本来の受容・産出の言語処理プロセスに沿った活動は増えるはずだ。「話すこと」「書くこと」といった産出技能を意識することで、「読むこと」「聞くこと」といった受容技能への取り組み方も違ってくるだろう。単にテキストからメッセージを引き出すことを目標にしてしまうと、言語習得に必要なインテイクの量と質が下がってしまう。また、「文法」をそのためだけに指導しても、四技能における実際のコミュニケーションでそれら

の「文法」を使えるようになる訳ではない。

大学入試の四技能化によってもたらされるであろうバランスの取れた英語指導観が、従来の「読み・書き」の指導を、「言語形式」のみに焦点を当てたものから、「意味のやり取り」に焦点を当てたものに変えていくのではないか。それでこそ、学校英語教育がこのグローバル化の時代に活きてくる。

◆　◆　◆

さて、最後に、英語教育に大きな変化をもたらす可能性があるものとして、テクノロジーの急速な発達を挙げておこう。

ここ数年でも、機械翻訳や音声認識の技術は、ものすごい勢いでその精度を上げている。教科書程度の英語はもちろん、新聞記事や論文であっても、かなりの精度で翻訳してくる。おそらく現在の精度でも、訳読式の授業で生徒が翻訳アプリを使って教科書の英文を訳していたとしても、多くの教師は気づかないかもしれない。しかも、翻訳結果は一瞬で返ってくる。音声認識の精度も、携帯電話で、多くの人々がすでに実感しているところだ。機械翻訳にしても、音声認識にしても、その精度は今後ますます高まるだろう。

また、機械翻訳の技術と音声認識の技術に音声合成の技術が加われば、機械による通訳も可能となる。日本語の音声入力を音声認識システムで認識し、それを機械翻訳で英語に翻訳する。その翻訳結果を音声合成して英語の音声を出力する。これが日英通訳のプロセスであるが、もちろん、この逆も可能である。

とはいえ、製品の取扱説明書や論文などの明示的な文章の翻訳ならいいが、現時点では、文脈依存の発話の通訳精度は高くない。また、笑いや皮肉の翻訳などはほぼ不可能だ。

実は、こうした翻訳テクノロジーと付き合うには、文脈に依存しないような、曖昧さを排除した日本語にして入力をしなければならない。有名な「僕はウナギ」という文も、このままではI am an eel.と返してくるだけだ。だから、機械翻訳の際には、「僕はウナギを注文します」や「僕はウナギが食べたい」というように、日本語としては時に不自然なくらい明示的に話す必要があるのだ。少なくとも、当面は。

英語はこんな言語だからこう入力をした方がいいという感覚や英語を話す人たちはこんな場面ではこんな感じで話すというような知識を持っている必要がある。日本語だけの世界に暮らしていては、英語の主語に当たる語を示さなければならないということや「先生はうれしいよ」というようなときには、「私はうれしい」みたいに言わないときちんとした英語には訳してくれないなどということは、思い至らないだろう。実は、こうした感覚や知識は、実際にその言語を学ぶことによってしか身につかない。また、こうした翻訳テクノロジーは、時にとんでもない誤訳を生み出すが、こうした誤訳に気づくのも皮肉にも、ある程度の英語力が必要なのだ。「ウナギを注文する」という意味での「僕はウナギ」を翻訳ソフトがI am an eel.と訳したときに、「そういう意味じゃない」と気づくのも、ある程度は英語がわかってこそである。この意味でも、英語教育の果たす役割は大きい。

車の自動運転が話題になっているが、意味処理の苦手なコンピュータによる機械翻訳は、当面は車の運転アシストのような役割を果たすだろう。（運転アシストの車に乗るには、車の免許が必要だ。）

生徒たちが日本で生きようと海外で生きようと、二十一世紀はグローバル化した世界である。そして、そこでは、世界の人々との共生と新しいテクノロジーとの共生が必要となってくる。

●参考文献
ベネッセ教育総合研究所『中高生の英語学習に関する実態調査２０１４』
https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356
アルク教育総合研究所『日本の高校生の英語スピーキング能力実態調査Ⅲ―高校1年次から3年次で高校生の英語力はどのように変化したか―』
https://www.alc.co.jp/company/report/pdf/alc_report_20180731.pdf

PROFILE
専門は、英語教育学。中学校英語検定教科書NEW CROWN English Series（三省堂）代表著者。著書に、『テストが導く英語教育改革：「無責任なテスト」への処方箋』（三省堂）、『コミュニカティブ・テスティングへの挑戦』（三省堂）など。

特集 グローバル化する社会における英語教育

TOKYO GLOBAL GATEWAY 東京都英語村の狙いと特徴

――7,000㎡のグローバル空間で英語への意識を変える

森 晶子（もりあきこ）
（東京都教育庁指導部 国際教育事業担当課長）

TOKYO GLOBAL GATEWAY（エントランス）

飛行機内のシーン（エアポートゾーン）

二〇一八年九月六日、東京都江東区青海、ウォーターフロントのビルに、都内をはじめ全国の子供たちのための新しい空間が誕生した。東京都英語村TOKYO GLOBAL GATEWAY（以下、「TGG」）である。窓の外には東京港の埠頭が広がり、空には羽田に離発着する飛行機が行き交う、七千㎡のグローバル空間。東京都教育委員会の構想から四年、事業の具体化から二年半での開設である。

館内では連日、数百人の子供たちが外国人スタッフ達と英語で和気藹々と触れ合い、英語に興味がもてるようになった、楽しかった、また来たい、等の声が聞かれる。引率の先生方からも高い満足度が寄せられている。

今年度の利用については、二〇一八年九月から二〇一九年三月までの七ヶ月間で、学校による利用は約四百校。都内の学校のみならず、九州から北海道まで全国の学校から申し込みがある。個人利用と併せて五万人以上が利用する予定である。

なお、二〇一九年度についても既に全国から予約受付を開始している。

TGG開設のねらい

学校で学んだ英語を実践的に話す場の提供

東京都教育委員会（以下、「都教委」）ではこれまで、様々な英語教育や国際教育の施策を展開してきた。高等学校を中心とした全都立校へのJET（The Japan Exchange and Teaching Programme）によるネイティブスピーカーの配置、東京をテーマにした実践的な独自教材『Welcome to Tokyo』の作成、生徒や教員の海外派遣、授業でのオンライン英会話等の導入、校内で昼休みや放課後に英語を使う機会を設ける取組等の他、姉妹校交流や留学生の受入等による国際交流の支援等々である。

それでもなお、子供たちが、学校で学んだ英語を実践的に使い、外国人と触れ合い、英語をツールとして話す楽しさや必要性を感じる場は十分でなかった。子供たちに、自分の言葉として英語を使い、通じた、伝わった、という成功体験を与えたい、そのことを動機づけとして、英語学習の意欲向上や内向き志向の打破につなげたい、という思いから、英語村の開設を施策として打ち出した。

そして、行政が一定の支援のもと、リーダーシップを取りつつ、整備・運営は民間事業者（株）TOKYO GLOBAL GATEWAYが主体的に行うこととした。

学校と世界・実社会とをつなぐ新たな体験型学習手法

他にはない、TGGの特徴

TGGは、他のどの英語村とも違う。その特徴は、各種の英語教授法の要素を取り込み、学習指導要領の目標にも適合した体験型学習で、成功体験の創出等により、学びに向かう力の涵養を重視した手法という点である。

理論を効果的な実践プログラムとして提供するには、ユーザーがそのプログラムを受け入れやすい環境を整える必要がある。TGGでは、

・七千㎡というスケール（同時に約六百人の子供がプログラムを体験することが可能）

・海外のような空間設計

・子供八人につき一人一人のイングリッシュ・スタッフ「エージェント」が付き添い、絶えず発話を促す少人数制

・約三十カ国百人以上のイングリッシュ・スタッフ

・東京ならではの、行政が関与する事業ならではの、国内外の多様な機関との連携による本物の体験・素材

といったインフラ環境によって、子供たちが自分事として英語を使う必然性・必要性を創出した。

その上で、課題解決型のアクティビティを主軸とし、内容言語統合型学習（CLIL：Content and Language Integrated Learning）、STEAM（科学 Science、技術 Technology、工学 Engineering、芸術 Art、数学 Mathematics を活用した文理融合の課題解決型教育）、児童・生徒中心の指導法などの考え方を活用し、

・子供たちには、間違いを恐れずに英語を発話してもらい、成功体験を積んでもらう

・アトラクション・エリア（日常生活シーン）、**アクティブ・イマージョンエリア**（プログラミング、文化、ビジネス、疑似留学、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）など多様なテーマ設定）**という二系統で、子供たちの関心を惹く内容とする**

・発達段階や英語の習熟度に応じた多様なレベル設定にする

といった方針でプログラム展開している。

なお、英語教育としての品質を確保するため、学識経験者に監修して頂いている。

学校教育との連携

教育課程に位置付けた利用への配慮と事前事後学習等

TGGのもう一つの特徴は、英語の授業や総合的な学習の時間、学校行事など、多様な位置づけで学校が利用しやすいよう配慮している点である。

「エージェント」が、児童・生徒個々人の活動状況をフィードバックし、利用後に学校に送付する。また、グループ活動を中心とするほか、スチューデント・アグリーメントとして行動規範も設けている。

TGGの利用効果を高めるためには、単発の活動にせず、学校での事前学習、事後のフォローアップが重要だと考えている。そのため、事前学習資料なども送付している。当日の児童・生徒の活動の様子、「エージェント」のサポート手法を観ることが事後指導に役立つとの、引率の先生方からの意見も多い。

今後は、様々な学校の活用事例を共有する等、TGGを、学校教育の枠組を超えた、初等中等教育における英語教育改革のハブとしていきたい。

多くの子供たちが、このゲートウェイを通って、自信や可能性を掴んでくれることを期待している。

オーストラリア　クイーンズランド州現職教員による授業も（クイーンズランド州教育省より提供）

【学校利用コース（半日又は1日）】

チームビルディング → アトラクション・エリア → アクティブイマージョン・エリア → リフレクション

学校利用	都内	都外
半日コース（3.5時間）	2,400円（税抜）	3,500円（税抜）
1日コース（7時間）	4,800円（税抜）	6,800円（税抜）

●上記のコースには、①チームビルディング、②アトラクション・エリア、③アクティブイマージョン・エリア、④リフレクション、がパッケージとして含まれます。

●その他のプログラムについては、株式会社TOKYO GLOBAL GATEWAYへお問い合わせ下さい。

PROFILE

二〇〇一年東京都入庁後、政策企画局、日本政策投資銀行、財務局などを経て二〇一六年度より現職。これまでの国際業務経験等を基に（株）TOKYO GLOBAL GATEWAYや国際交流事業を担当。

特集 グローバル化する社会における英語教育

東京2020オリンピック・パラリンピックと英語教育

――「英語が好き」と思う子供たちに

金指大輔（かなさしだいすけ）
（東京都 江東区教育委員会事務局 統括指導主事）

図1

① 江東区において二十競技が開催

江東区は、歴史と未来が共存する水彩都市である。松尾芭蕉や伊能忠敬が暮らした地でもあり、今でも多くの伝統と文化が息づいている。また、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会では、二十競技の開催が予定されており、開催に向けて活気あるまちづくりが推進され、未来に向けて日々発展をし続けている。（図1）

オリンピック・パラリンピックの競技が多く行われるという恵まれた環境を生かした取組を充実させるため「江東区オリンピック・パラリンピック教育推進計画」を二〇一七（平成二十九）年三月に策定した。この計画では、区内の公立幼稚園二十園、小学校四十五校、中学校二十三校、義務教育学校一校に在籍する、すべての子供たちが、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピックに関わることや、体験を通して実感をもって学ぶことを視点としている。主な取組として、区内の競技会場をバスで巡る『江東区にオリンピック・パラリンピックがやってくる』、出場する国々について学習する『世界の国旗・国歌について学ぼう』、部活動での子供たちの夢をかなえる『「部活動☆夢応援プロジェクト』などを行っており、開催まで二年を切った現在、それぞれの学校で充実した学習を行っている。

② 「どの子も伸びる 学びのまち こうとう」

二〇一三（平成二十五年）度より、「こうとう学びスタンダード」を定め、本区で学ぶ、すべての子供たちが確実に身に付けたい内容を明らかにし、小・中学校において、その定着を目指している。その中でも、「英語スタンダード」（図2）は、コミュニケーション能力の向上を図る上で、身に付けさせたい内容を示したもので構成している。

図2

「英語スタンダード」

（小学校）
- □ 英語で積極的にコミュニケーションをとります
- □ 英語であいさつや自己紹介をします
- □ 英語で道案内をします
- □ 英語で将来の夢を話します

（中学校）
- □ 英語で積極的にコミュニケーションをとります
- □ 英語であいさつや自己紹介ができます
- □ 英語で道案内ができます
- □ 英語で自分の学校を紹介できます
- □ 英語でインタビューができます
- □ 英語で身近なできごとや自分の考えを伝えることができます
- □ 英語で書かれた案内文を読み、その内容を理解できます
- □ 英語で江東区のよさを伝えることができます

東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会の開催時には、海外からも多くの人々本区を訪れることが予想され、本区の子供たちが、場面・場面で進んでコミュニケーションを図ることができるよう、実践的な授業を進めている。

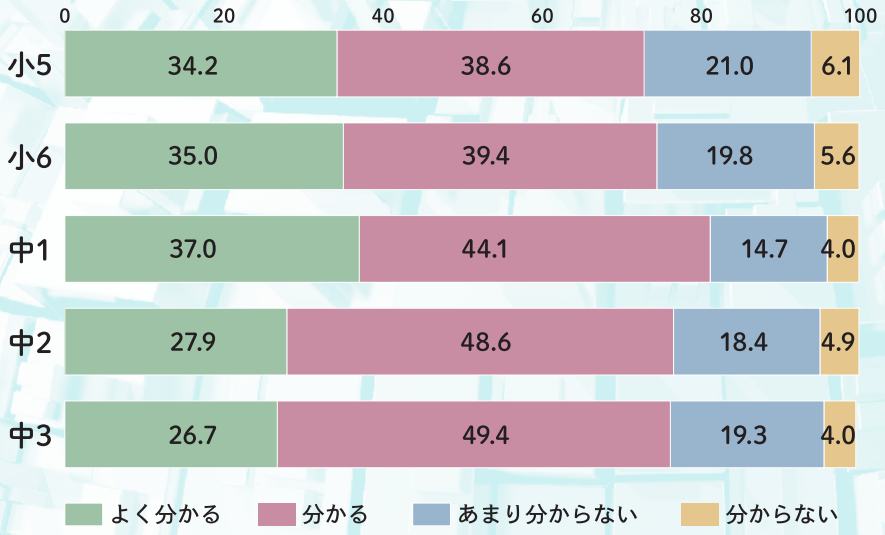
「こうとう学びスタンダード」が確実に定着することを目指し、本区では、定着度調査を行っている。とりわけ「英語スタンダード」の定着については、児童・生徒アンケートの中で、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会の開催時を想定した質問項目を設定して、調査を行っている。昨年度の結果から、「外国の人とのあいさつの仕方や簡単な質問の仕方、答え方が英語で分かりますか。」（図3）という質問において、小学校では、約七割、中学校では、約八割が肯定的な回答をしている。区内の学校が「チーム江東」として、「どの子も伸びる　学びのまち　こうとう」をスローガンに、「こうとう学びスタンダード」の推進と主体的な学びの定着を目指している。

③ Let's Enjoy Englsih

二〇一七（平成二十九）年三月に告示された新学習指導要領において、小学校では、中学年に外国語活動が、高学年に外国語科が導入された。新学習指導要領に示された目標では、小学校では、コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力の育成を目指し、中学校では、コミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指すことと示されている。

そこで、本区では、「英語教育推進委員会」を設置し、英語教育の充実について、検討を行っている。委員会のメンバーには、東京外国語大学大学院教授の根岸雅史先生に参加していただき、これからの英語教育について、ご教授いただいている。検討している内容としては、「英語が好き！英語で話したい！」という子供たちの願いを実現できるように、次のような段階を設定し取組を進めている。

図3 「外国の人とのあいさつの仕方や簡単な質問の仕方、答え方が英語でわかりますか。」



☆**Step1『なれる』** 児童・生徒が英語に慣れる機会の充実…外国人講師の派遣時数の確保と効果的な活用

☆**Step2『まなぶ』** 児童・生徒が主体的に学ぶ授業の充実…研修・指導資料の充実、「こうとう学びスタンダード」の確かな定着

☆**Step3『つかう』** 児童・生徒が学んだ英語を使う機会の充実…授業以外で英語を使う機会を増やす工夫

これらの検討を受け、小学校では、朝の会でのスピーチを英語で行ったり、英語集会の中で、自己紹介をし合ったり、校内放送を英語で行うという実践を等が実施されている。中学校では、少人数での授業を実施し、英語で会話をする機会を増やしたり、コミュニケーション場面を設定した会話練習の時間設定や、修学旅行を活用した、外国人へのインタビューを行ったりしている。

英語教育の充実も含め、今後も、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されることをチャンスと捉え、江東区で学ぶ子供たちにとって未来につながる歴史の瞬間を体感することができる、またとない機会となるよう、子供たちの心に確かに刻むサポートを目指していく。

PROFILE
小学校教員、江東区教育委員会指導主事を経て、二〇十八（平成三十）年四月より、本職に就任。

小説のなかの三省堂刊行物

瀧本多加志（株式会社三省堂 常務取締役 出版局長）

【三省堂の歩み】

幅広い出版活動を長きにわたって続けてきたためだと思われますが、三省堂の刊行物は、時として小説中に登場することがあります。今回は、その中から明治・大正・昭和の例を一つずつ紹介することにします。

●森鷗外「かのように」

鷗外が一九一二年（明治四五年）に発表した「かのように」は、子爵家に生まれて歴史家を志す主人公・秀麿が、進歩的思想と自らの社会的出自との間で板挟みになり、思想的葛藤を繰り広げる様を描いた短編です。ところで、その主題とは関係のない作品序盤に、「子爵は奥さんに三省堂の世界地図を一枚買って渡して、電報や手紙が来る度に、鉛筆で点を打ったり線を引いたりして、秀麿はここに著いたのだ、ここを通っているのだと言って聞かせた。」という一文があります。これは、洋行中の息子・秀麿の安否を気遣う「奥さん」に、夫である「子爵」がヨーロッパの地理を教える一節です。

この世界地図は、一九〇九年（明治四二年）に、三省堂創業三〇年記念として出版された『家庭用世界地図』のことだと思われます。鷗外が「一枚」と書いているのは、この地図が書物の形態ではなく、掛図仕立てだったことに由来するようです。三省堂は、明治中期以降、さかんに地図の出版を行い、明治三六年に国定教科書が制定された際には、地図の指定を受けたほどだったのです。

●中野重治『梨の花』

辞書もまた、少なからず小説中に現れます。中野重治の自伝的長編小説『梨の花』の終わり近くにも、印象的な場面があります。時代は大正初期。主人公・良平は福井県の農村育ちで、中学校にあがって福井市に下宿します。入学間もない頃の教室でのことです。「何人かの生徒が、自慢そうにいったその調子が良平にへんに引っかかったのだった。『……カナザワのジリン、持ってる……』『僕のは、オオツキのゲンカイさ……』いかにも自慢たらしくそれが良平に聞こえた。」

知的で都会的なものへの反撥と憧憬が見事に描かれた場面です。当時の国語辞典の双璧である『辞林』と『言海』が、その象徴となっているわけです。金沢庄三郎編『辞林』（一九〇七年＝明治四〇年初版）は、後に『広辞林』に発展する、当時の三省堂が有した主力国語辞典でした。現代の『大辞林』も辞林系辞書です。

●大西巨人『神聖喜劇』

「私がここに持って来た書物は、この『広辞林』のほかに、『改訂コンサイス英和新辞典』、『田能村竹田全集』……」。これは、大西巨人の大長編小説『神聖喜劇』巻首の記述です。主人公・東堂太郎は一九四二年一月、陸軍二等兵（教育補充兵）として対馬要塞の重砲兵聯隊に入隊します。その東堂が屯営内に許可を得て持ち込む書物を列挙したくだりです。

ジュリアン・ソレルに匹敵する記憶力の持ち主であり、凄まじい読書家として設定された作中人物が、軍隊内に持参する書物に、三省堂の辞典二点が含まれていること。これは作者の恣意や偶然ではなく、虚構内とはいえ、三省堂にとって誇らしい事例です。同時に、先達が創造したこれらの価値を、未来の出版事業につなげることが、私たちに課せられた責務だと感じているところです。

PROFILE

［たきもと・たかし］一九八七年、三省堂入社。辞書・事典を中心に、幼児ものの「絵じてん」から、学術専門辞典の『言語学大辞典』まで、多種多様な書籍編集に携わる。二〇一〇年に出版局長に就任し、現在に至る。

「三省堂WORD-WISE WEB」リニューアルオープンのお知らせ

2018年七月に、「三省堂WORD-WISE WEB」をリニューアルオープンいたしました。

＊Word-Wise …「ことばに関する」「ことば志向の」などの意味。

三省堂の辞書出版物を中心とする「ことばと辞書の総合サイト」として2004年にオープン。2007年からは、様々な方々にご寄稿いただき、ことばと辞書周辺の役に立つ情報を発信するサイトをめざしてまいりました。そしてこのたび、「三省堂WORD-WISE WEB -Dictionaries & Beyond-」として内容を一新、デザインもスマートフォンやタブレットに対応したものにリニューアルいたしました。

小社の辞書・事典の情報のほか、ことばと辞書周辺の最前線の情報や、辞書には載らないあれこれを、それぞれの分野の第一線で活躍する方にご寄稿いただいている「ことばのコラム」がご覧いただけます。また、これまで以上に辞書・事典に関する情報、ことばについてのコラムを充実させてゆきます。

（三省堂辞書ウェブ編集部）

URL：https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/

近刊紹介

堀田龍也先生・佐藤和紀先生による，大学教職テキスト，登場!!

2019年3月初旬 刊行予定

堀田龍也・佐藤和紀［編著］

A5判／256ページ（予）
ISBN：978-4-385-36264-9
予価2,000円+税

■目次

はじめに

第1部 教育の方法
- 第1章　学習指導要領と授業
- 第2章　教育方法の原理と学習評価
- 第3章　授業中の教師の意思決定

第2部 授業の技術
- 第4章　授業における発問と指示
- 第5章　教科書活用の技術
- 第6章　教材活用の技術

第3部 授業改善のためのICT活用
- 第7章　教師によるICT活用
- 第8章　学校放送番組の活用
- 第9章　思考力を育てる授業

第4部 児童生徒の情報活用能力の育成
- 第10章　児童生徒によるICT活用
- 第11章　情報活用能力の育成
- 第12章　情報モラル教育
- 第13章　プログラミング教育

第5部 学校の情報化
- 第14章　校務の情報化
- 第15章　学校の情報管理

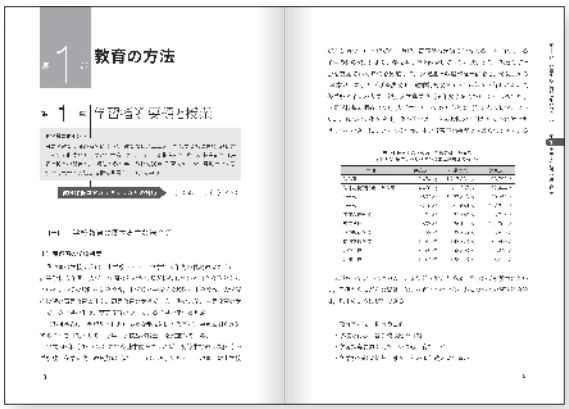
参考：教職課程コアカリキュラム抜粋
索引

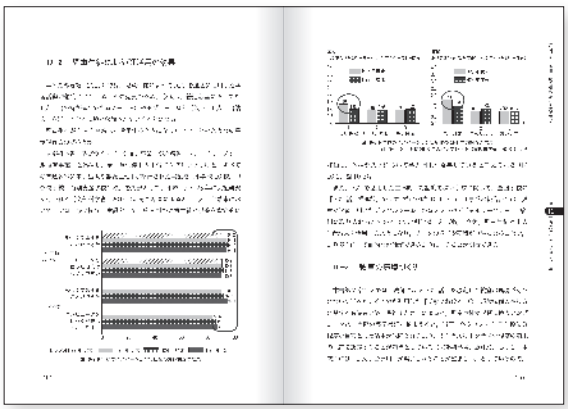
■編著者プロフィール

堀田龍也（ほりた・たつや）
東北大学大学院情報科学研究科教授。博士（工学）。専門は，教育工学・情報教育。中央教育審議会初等中等教育分科会委員，同教員養成部会委員，教育再生実行会議技術革新WG等を歴任。主な著書に『だれもが実践できるネットモラル・セキュリティ』（三省堂），『プログラミング教育導入の前に知っておきたい思考のアイディア』（小学館）等。

佐藤和紀（さとう・かずのり）
常葉大学教育学部初等教育課程専任講師。博士（情報科学）。元東京都公立小学校主任教諭。専門は，教育工学・情報教育。文部科学省「学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議 効果的なICT活用検討チーム」，同「情報活用能力調査の今後の在り方に関する調査研究」等の委員を務める。

■ページイメージ





※確定情報は，弊社ウェブサイト近刊案内にてご案内しております。

教育最前線
Education Vanguard
第3号
二〇一九年一月二十五日発行
[編集・発行人] 北口克彦
[発行所] 株式会社 三省堂
[印刷所] 有限会社 セントラル製版
design: tsuyoshi＊graphics

123RF / bootleg.um

SSD 三省堂

三省堂教科書・教材サイト　http://tb.sanseido.co.jp

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14　TEL (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)

●大阪支社　〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3　TEL (06) 6341-2177
●名古屋支社　〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31 協和丸の内ビル2F　TEL (052) 953-9211
●九州支社　〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1　TEL (092) 531-1531
●札幌営業所　〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15 ビル3F　TEL (011) 616-8722